

「燃やす者」「燃える者」「逃れる者」： 「Bal des ardents 燃える者達の舞踏会」の中で フロワサールが描くイメージについて

竹田千穂

1389年から1400年春までの出来事が記録されたジャン・フロワサールの『年代記』第四巻には、騎士社会の斜陽を象徴するような出来事が多く語られている。その中でも目を引くのが「燃える者達の舞踏会 Bal des ardents」と呼ばれる陰惨な事件の記述である。1393年1月28日の晩、シャルル6世のサン・ポールの館では、王妃の侍女の一人で寡婦であったカトリーヌ・ド・ファスタヴァラン Catherine de Fastavarin と、王の家臣であるヴェルマンドワ Vermendois⁽¹⁾の若き騎士の結婚式を祝う舞踏会が開かれたが、王とその取り巻きの5人の騎士達は、この時のために密かに余興を準備していた。彼らは誰にも知られずに野蛮人の姿に仮装をすると、皆を驚かそうと宴の席に踊りながら乗り込んでいったのである。誰もが、この闖入者達が一体誰なのかを知ろうとしているその時に、ある人物によって近づけられた松明から火の粉が飛んで踊り手の1人の衣装に燃え移ったかと思うと、仮装をしていた者の内5人が瞬時に火に包まれた。1人は、近くにあった水を張った桶に飛び込んで辛くも命拾いをしたが、残りの4人は壮絶な死を遂げる。幸運にも王は、偶然この踊りの輪から離れていたために難を逃れることになったという事件である。フロワサールはこの一件に関してかなり細かい描写を残しているが、その模様は、『サン＝ドニ修道士の年代記』*Chronique du religieux de Saint-Denis*の中でミシェル・パントワンが描きだした様子とは趣が異なり、独特の視点を持って描かれることとなる。この修道士が「火をつけた者」と「火から逃れた者」の姿をばかしてははっきりと描こうとはせず、焼死した4人の騎士の内1人がこの事件の全ての非難を背負うように描く一方で、フロワサールが焼死した4人の騎士達の中で、ある一人の騎士の取り分け花のある「死」を描き、火をつけたのが誰であったか、王がどのように焼死を逃れることができたのかを具体的なイメージとして提示したのはなぜなのだろうか。この場面に描かれる、「燃えながら」騎士道最期の花を示す若い騎士が、果たしてフロワサールの歴史記述においてどのような意味を持つ存在であったのかに注目しながら考察してみたい。

I. パントワンによる事件の記述とその構成

パントワンは、この出来事の記録の中で、まずこの事件の舞台となる王宮で行われた王の家臣

と王妃の侍女との目出度いはずの結婚式が、実は花嫁にとって4度目の結婚であったことに触れ、そのような結婚が引き起こしていた当時の社会的風習について語る。

Nam in multis locis regni quidam fatui homines mulieri nupcias iterare ignominiam execrabilem reputant. Unde, quociens casus accidit, penes eos tanta immodestia inolevit, quod se in larvis et inordinatis vestibus turpiter transfigurantes, in amborum conjugium displicentiam ignominiosa verba soleant publice divulgare.⁽²⁾

というのも王国の多くの場所において、ある愚かな男達は、結婚を繰り返す事が女性にとって嫌悪すべき不名誉な事だとみなしているのだから。そしてそのために、そのような事が起きる度、かれらの側の節度のなさが非常に増すのだ、なにしろ卑劣にも奇抜な仮面と服装とで変装し、侮蔑の言葉で夫妻双方に対しての不快感を公に表明する事が習慣になっているのだから。

パントワンが言及するこの社会的風習はシャリバリ charivari と呼ばれ、14世紀においては、特に寡婦あるいは寡の婚姻に対してむけられていた。人々は行列を組み、楽器代わりにフライパンと鑊や塹、すりこぎをたたいてひどい騒音をたてながら、叫んだり卑猥な身振りをしたりしてその結婚をからかった。ギンズブルグによると、この風習の本来の起源は、中世ヨーロッパの民衆文化にひろまった chasse-sauvage という伝説にある。本来の chasse-sauvage とは、早世し、魂の癒されることのない死者の群れが、夜にひどい喧噪の中を、ペルヒタ Perchta、ホルダ Holda、ディアナ Diana、ヘカテ Hecate などの女性の神、あるいはアルルカンの仮面の起源とされるエルレシヌス Herlechinus のような魔神に率いられて駆け抜けていくという迷信にあり、当時のシャリバリの参加者は、その行列の中で chasse-sauvage としての死者の魂の群れを再現していたのである⁽³⁾。ストックは、この風習が、その異教的性格ゆえに、そして増長した若者達がみせた行き過ぎた行為ゆえに、何度も教会の禁止条例の対象となった点を鑑みて、この余興での王とその5人の仲間達に関する修道士の記述を考察する。

The phrasing of his account conveys his profound disapproval of the behavior of the king and his courtiers, whose disgraceful postures and obscene gestures are exacerbated by their cries, which he compares to the howling of wolves. Meanwhile, without foreseeing the havoc he could wreak, somebody tossed a spark of flame toward one of the charivari participants, and “in ictu oculi” (in the blinking of an eye) the flammable costumes of the dancers ignited. The king and Nantouillet survived, but the other four dancers died of their burns. The Monk goes into gruesome detail about the physical effects of the fire on the

「燃やす者」「燃える者」「逃れる者」：
「Bal des ardents 燃える者達の舞踏会」の中でフロワサルが描くイメージについて

bodies beneath the close-fitting costumes, even claiming that the dancers' almost-melted genitals dropped to the floor of the hall.⁽⁴⁾

その報告の表現は、王とその廷臣達のこの振舞いに対して強い非難を示しており、彼らの下品な姿勢と卑猥な身振りは、彼〔筆者〕がオオカミの遠吠えになぞらえるその喚き声によってより一層ひどいものになっている。そのうちに、自分が与えるひどい被害を予想もしないある者が、シャリバリの参加者の一人に火の粉を飛ばしてしまい、それは「瞬く間に」踊り手の燃えやすい衣装に燃え広がった。王とナントゥイユは助かったが、他の4人の踊り手達は焼け死んだ。この修道士は、彼らのぴっちりとした衣装の下で炎が身体へ及ぼした影響について、踊り手のほとんど溶けかけた生殖器が広間の床に落ちたことにまで言及し、ぞっとするような詳細を説明している。

ストックは、「燃える者達」の惨状が、天からの罰であるかのように提示されること、そしてさらに、彼らの余興が、反社会的な行為であるシャリバリとして、いかに下劣な性質の身振りや叫びを伴ったものであったかを描くのみならず、その踊りへ異教のイメージを加え、悪魔的な勢いを与えたこと、そしてこの計画の参加者の1人ユゲ・ド・ギュイゼ Huguette de Guisay の悪徳を筆者が行を費やして強調することが、この余興の参加者達へ松明の火を近づけた「ある者」から目をそらさせ、非難の矛先を変えることにもなる一方で、悪しき者達に神の正しき裁きが下り、王は神の恩寵ゆえ守護天使に守られて間一髪で惨事を逃れるという教会の意向に即した構図を描くことになるのだと考える⁽⁵⁾。

実はパントワンは、「De fundacione capelle domini ducis Aurelianensis in domo Celestino-rum」(ケレスティアヌス修道院におけるオルレアン公の聖堂の建設について)と名付けられた別の章の中で「ある者」と呼んだ「燃やす者」の正体を明示している。

Diu inter curiales sciscitatum memini quis actor temeritatis tam dampnose extitisset, et hii tandem in dominum ducem Aurelianensem culpam refunderunt; et quamvis dixerim sine causa, addam et quod tunc inulta mansit, cum non esset qui ob ejus magnitudinem sibi dicere ausus esset: « Cur fecisti? »⁽⁶⁾

その日廷臣達の間で問われていたことを私は覚えている、軽率さでもってこのような大打撃を与えた行為の有害な下手人が誰なのかと、そしてついにこれらの者達は、この過ちがオルレアン公にあることに思い至った。しかしながら、私は〔彼に〕動機はないと言うべきであった、私は言い添えるつもりだが、結局この方は罰せられることはなかったのだし、たとえそうでなかったところで、一体だれがあのような権勢のある方に敢えて言っただろうか、「なぜなされたのですか?」と。

パントワンは、王弟オルレアン公の「燃やす者」としての行為を決して曖昧なままにはしておかなかった。しかしそれが不注意によって引き起こされた過失であることも示したのである。有識者達にたしなめられたオルレアン公は、若さゆえのその軽薄さ・軽率さを改めることを誓い、絶えず熱心に祈ることで神へ自らの行為を贖うために、ケレスティアヌス修道院に石造りの大きな聖堂を建設する。パントワンはこの後で、その聖堂をある口さがない人々が、公の「罪の記念碑」と呼んでいたことを付け加えずにはいられない⁽⁷⁾。だが彼は、「燃える者達の舞踏会」の顛末を描いた「*De illis qui exercendo illicita combusti fuerunt*」(禁じられた行為をなすことで焼かれてしまった者達について)と名付けられている章へ、「燃やす者」として王弟を決して登場させはしなかった。

「燃える者」達の陰惨な状況の描写に引き続き、パントワンの報告は、その中の一人、ユゲ・ド・ギュイゼの描写へと移る。とりたててこの人物を長々と描写する必要性はどこからくるのだろうか。シャルル6世はこの事件の前年8月5日から8日の間に最初の狂気の発作に襲われた⁽⁸⁾。そしてこの事件が起きた年の6月中旬に2回目の発作を起こすことになる。王にとっても国にとっても危機的状況が始まったばかりのこの時に、なぜ王はこのような馬鹿騒ぎに自ら巻きこまれたのか。パントワンの公正さは、事的首謀者にユゲ・ド・ギュイゼを祭り上げることはしない。しかし、ユゲがその平素の悪行ゆえに、4人の焼死者の内では一番長く苦しまなければならなかった事実を記録する。王をたぶらかし、シャリバリという反社会的行為に参加させ、このような事件に巻き込まれるような状況へ王を誘い込んだ者達の中で、最も厳しい神の罰を受けた象徴的存在として、彼は生前に彼が犯した様々な罪とともに記憶されるべき者であった。パントワンにとって、彼は王宮での悲惨な事故の単なる犠牲者の一人ではなく、国の象徴である王を、延いては王国全土を恐ろしい危機にさらした者達の中でひとときわ目立つ悪しき存在であったのだ。それゆえに、彼がどのような人物であり、どのような目に遭ったのかを、この人物への明らかな憤りを抱いてパントワンは記録したのである。

Is, cunctis viciis deditus, penes graves et modestos infamis reputabatur, tanteque perversitatis existebat, quod naturam omnium virorum ignobilium abhorrens et eos canes appellans, eos sepius latrare et varietatem latratuum fingere compellebat. (...) Cum vexarentur iterum tormentis prelibatis, non poterat abstinere quin servos proprios canes vocans, eos post se vivere judicaret indignos, donec verbis finem fecit ignominiose moriendo. Cujus mortem aulici audientes, « *Te Deum laudamus* » in plana aula regia pre nimio gaudio clamaverunt. In odium quoque ejus, cum ad Borbonium, unde oriundus fuerat, in feretro corpus ejus per villam Parisiensem defferretur, quamplures et quasi omnes verbum suum

「燃やす者」「燃える者」「逃れる者」：
「Bal des ardents 燃える者達の舞踏会」の中でフロワサールが描くイメージについて

consuetum, scilicet « *Latra, canis,* » libere exclamabant.⁽⁹⁾

あらゆる悪業と肉欲にふけていた彼は、真面目で慎み深い者達から恥ずべき者と見做されており、大層邪悪な人であった。全ての身分の低い者達を憎んで、彼らのことを犬と呼び、しばしば無理やり彼らを吠えさせたり、様々な鳴き声を真似させたりしていた。(中略) 被った苦痛にまだ苦しめられていた時、彼自身の従者達のことさえも犬どもと呼ぶ事をやめられず、自分より後に彼らが生き延びる価値などないと責めていたのだ、不名誉にも死ぬことによって言葉に終わりを与えるその時まで。この者の死を耳にした廷臣達は、あまりの喜びに王宮の中庭中で「我等は神であるあなたを讃えん」と叫んだのである。誰もが「抱いた」彼への憎しみのため、彼の出身地であるブルボネー Bourbonnais へ向けて、棺に入った彼の遺体がパリの地を運ばれる時、多くの人々、ほとんど全員が、彼の決まり文句、すなわち「吠えよ、犬め」と躊躇いもせずに叫んだのである。

最後にパントワンは、この事件がパリ市民によってどのように受け取られたのか、その反応へ目を向ける。この騒ぎは当然のことながらパリ市民の関心を引き、事件の噂が流れてすぐに、誤った情報で王が死んだと思ひ込んだ市民たちは、怒りにかられ、群れとなってサン・ポールの王宮に押し寄せた。彼らの怒りは、フランスの国とその民との命運が、いかに王という存在と分かち難く結びつけられているかを象徴するものとして書き留められる。その怒りは彼らの前に姿を見せる王の「声と身振り」によってのみ鎮められるべきものなのである。王は救われ、国は破滅を逃れた。神に選ばれた正統な王、その存在なしには権力者としての機能を維持することのないベリー公、ブルゴーニュ公、そしてオルレアン公の3人は、翌日すぐに行動を起こした。彼らはモンマルトル門からノートルダム教会まで行列を組んで裸足で歩み、ただ王だけは馬で行き、皆はそろって神と聖母マリアへ、王の、そして王国の危機から救われた感謝の祈りを捧げたのである。この点に言及しパントワンは記述を終える。この章はまさしくその章題が示す通り、「燃える者」と「逃れる者」についての記録である。「燃える者達」は、シャリバリという反社会的行為を、厚かましくも王宮で開かれた宴で行った軽薄で悪意ある者達であり、王は、その若さゆえの過ちによって、仮装で身分を隠した状態とはいえ、浅はかにもこの反社会的行為に自らを晒してしまう。しかし彼は、王国を体現する存在として、当然のことのように神の加護によって踊り狂う彼らから離れ、「逃れる者」となるのである。この構図に、「燃やす者」としての王弟の存在は必要ではない。よってルイ・ドルレアンの「燃やす者」としての行為は、別の章に記録されるのである。

II. フロワサールの記述とその構成

一方フロワサールの記述において、「燃える者達の舞踏会」はどのように描かれていくのだろうか⁽¹⁰⁾。パントワンがその記述の中で「燃える者」・ユゲ・ド・ギューゼのイメージを効果的に

用いたのと同様に、フロワサールもこの記述の中で、費やす行は少ないものの、「燃える者」・イヴァン・ド・フォワのイメージを効果的に用いている。この場面でフロワサールがイヴァンに費やす言葉は決して多くはないが、行数に反比例するように、イヴァンの存在が強く印象づけられるのは、フロワサールが「燃える者達の舞踏会」の章直前で、イヴァンがなぜ王付きの騎士となったのかを、前置きのように簡潔に説明するからである。

Quant ce visconte de Chastelbon, appellé de cy en avant conte de Foix, fu venus en France pour faire les droitures du relief et hommaige de la conté de Foix, ainsi comme il appartenoit, il amena en sa compaignie ung sien cousin, qui s'appelloit messire Euwain de Foix, filz bastard au conte Gaston de Foix, bel chevallier gent et joenne et de bonne taille, mais bastard estoit. Et en son vivant le conte Gaston de Foix, son pere, l'eüst volentiers fait hiretier de tous ses hiretaiges avec ung sien aultre filz qui s'appelloit Gratien, lequel demouroit emprés le roy de Navarre, mais les chevalliers de Berne ne s'i vouldrent onques assentir, sy demoura la chose en cel estat, car le conte moru soudainement, ainsi que vous avez oÿ recorder.

Quant le roy de France vey le joenne chevallier messire Yeuwain venu, si l'en ama grandement, (...), et en valurent grandement mieux les besoignes du visconte de Chastelbon et en ot plus hastive delivrance. Et s'en retourna le visconte de Chastelbon en son paÿs et messire Yeuwain demoura delez le roy et fu retenus des chevalliers du roy et de sa chambre à .xij. chevaulx et tous bien delivrez.⁽¹¹⁾

これから先はフォワ伯と呼ばれるこのシャトルボンの副伯が、そうあるべき通りに、フォワ伯領の臣従の礼の義務を果たしにフランスにやって来た時、同行者として、ガストン・ド・フォワ伯の庶子の息子、イヴァン・ド・フォワ殿と呼ばれていた彼の従兄弟を連れてきた。彼は美しい騎士で優美で、若く、立派な体格をしていたが、庶子であった。生前彼の父であるガストン・ド・フォワ伯は、彼をナヴァール王のもとに留まっておられたグラティアンと呼ばれるもう一人の息子とともに、その相続財産の継承者にと望んでいた。しかしベアルンの騎士達はそのことに全く同意をせず、事はその状況のまま動かなかった、なぜなら伯は突然亡くなったからである、あなた方がお聞きになった通りに。

フランス王は、訪れたこの若き騎士イヴァン殿をご覧になると、彼をたいそうお気に召した、(中略)、シャトルボン副伯にとってそれは願ってもないことだったので、話はより円滑に決まった。そしてシャトルボンの副伯は彼の地へもどり、イヴァン殿は王のおそばにとどまって、側仕えの王の騎士に取り立てられ、12頭の駿馬を全て〔王室によって〕賄われたのであった。

この騎士イヴァンとは、著者にとって一体どのような存在だったのだろうか。フロワサールは『年代記』第三巻の「ベアルンの旅」と呼ばれる箇所、かつてフォワ伯の領地へ取材旅行で訪れた時のことを語っている。そこで彼は、フォワ伯の唯一の嫡男が伯自身の手にかかり不幸な死を遂げた事、伯が自分の次なる正統な継承者ではあるが臆病者のシャトルボンの副伯を疎んじ、庶子ではあるが勇敢で騎士の資質に溢れた自分の2人の息子イヴァンとグラティアンへ領地を継がせることを強く望んでいることを知る。だが画策に走っていたフォワ伯の突然の死によって、領地の跡目問題は解決せぬまま残される。この後継者問題は、フロワサールにある問いを投げかけることになる。すなわち資質に溢れているにせよ、非正統な後継者が果たして受け入れられるべき存在なのか否か。この点について彼は思いをめぐらすことになる⁽¹²⁾。フロワサールにとってイヴァンは、封建制度の根幹を揺るがすような問題の象徴であり、目の離せない存在であった。フォワ伯の死後すぐに、領地に対する継承権を主張したいイヴァンは、城の宝物庫に父が残した財産があることから、城を占拠することで領主としての地位を確立しようと試みるが、領民の反対に遭って断念し、この一件は結局フランス王の裁量にゆだねられる。結果としてシャトルボンの副伯が領地を継いで王に臣従の礼をとり、宮廷を訪れたイヴァンは、王とほぼ同年齢であり見目麗しいために、すっかり王に気に入られ、そのまま王に仕える身となる。そしてこの「燃える者達の舞踏会」の中で、予期せぬ最期を迎えることになるのである。つまり「燃える者達の舞踏会」は、王宮で起こった恐ろしい悲劇と重ね合わさるように、フロワサールが、かつての庇護者フォワ伯の庶子である若き騎士の壮絶な死を提示する箇所となるのである。よってフロワサールはこの騎士の終焉を、否定的に描きはしなかった。この章で「燃える者」・イヴァンは、「燃やす者」・「逃れる者」とどのような対称を示すのだろうか。

フロワサールはその記述の中で、王宮で開かれた結婚式の花嫁が寡婦であったことには全く触れず、よってフロワサールの描いた宴の余興には、表向きはシャリバリの反社会的性質が与えられることはない。それはあくまで、「王とそこに集った貴婦人達の気晴らしのため」と提示されるのである。パントワンがその記述の中であれだけ注意を払ったユゴナン・ド・ジャンゼ（＝ユゲ・ド・ギユイゼ）Hugonin de Gensay⁽¹³⁾は、宴の余興の発案者として冒頭に現れるが、その後彼の存在は「燃える者達」のなかに溶け込んだように消えてしまい、代わりにイヴァンが記述に顔を出す。王を筆頭にした6人が、余興のためにこっそり仮装をしたところで、フロワサールは彼らの身に着けた衣装がいかに燃えやすいものであったかに触れた後、王とともにこの余興に参加することになるイヴァンが、賢明にも王に対して次のような警告をしたと書き記す。

« Sire, faictes commander bien à certes que nous ne soyons approuchiés de nulles torses car, se nous l'estions et que l'air du feu entrast en ces cottes dont nous sommes desguisez,

le poil happeroit l'air du feu, si serions ars et perdus sans remede, et de ce je vous avise. »

« En non Dieu », dist le roy, « Yeuwain, vous parlez bien et sagement et il sera fait. »⁽¹⁴⁾

「殿、確かに命じさせてください、我々にどんな松明も近づけられる事がないように、というのも、もし火の粉が我々の姿を変えているこの上着の中に入り込み、その火の粉が〔服に張り付けた〕毛に引火でもしたら、我々は焼かれ、手の施しようもなく助からないだろうと私には思えるのです。」

「神の聖名において」と王は言った、「イヴァンよ、正しく賢明な意見だ、そのようになされるだろう。」

王の命令が実行され、全ての火が壁際に遠ざけられたその後で、「燃やす者」・王弟ルイが、遅れて広間に到着する。この悲劇の舞台への遅れての登場は、「燃やす者」であるオルレアン公のその後の行為が、なんら含意のない単なる過失であることをはっきりと示すためのフロワサールの「演出」であると同時に、それを記す筆者の立場をも明確に示している。フロワサールは、オルレアン公の行動に故意を認めない。更に、惨事を引き起こした後で、公自身によって、人々に対し自己弁護をする機会を与える。しかし公のこの弁明は、王の四人の仲間達に対する「故殺」の罪を拭い去る代わりに、「過失」の罪を自白するよう構成されているのである。

Ainsi se desrompy ceste feste et assambee de noeces en tristesse et en anoy, quoyque l'espeux et l'espouzee ne le peussent amender, car on doit supposer et croire que ce ne fu point leur coulpe, mais celle du duc d'Orliens, qui nul mal n'y pensoit quant il avala la torse : joennesse luy fist faire. Et bien dist tout en audience quant il vey que la chose aloit mal :

« Entendez à moy, tous ceulx qui me poeent oÿr : nulz ne soit demandez ne encoulpez de ceste advenue, car tout ce que fait en est, c'est tout par moy et en suy cause. Mais ce poise moy quant oncques m'avint. Je ne cuidoye pas que la chose deuist ainsi tourner car, se je eusse cuidié ne sceu ce, je y eusse bien pourvieu. »⁽¹⁵⁾

かくしてこの宴と結婚式の集まりは、悲しみと苦しみの内に終わったが、とはいえ、花婿と花嫁がそれを償うことなどできはしない。というのも、それは彼らの罪などでは全くなく、オルレアン公の罪だと考え、信じるべきであるのだから、この方があの松明を下げた時、少しも悪い意図をお持ちではなかったのであるが、若さが彼にそうさせたのである。事が悪い方へ行ってしまったのを見て、彼は皆のいる前で確かに言った。

「私の声が聞こえる者は皆、私の言うことを聞いてくれ。この出来事について、誰も非難され、咎められないように。というのも、引き起こされたことは、全て私によるものであり、

「燃やす者」「燃える者」「逃れる者」：
「Bal des ardents 燃える者達の舞踏会」の中でフロワサールが描くイメージについて

私が原因なのだから。これまでにあんなことが私に起きたので、私はひどくつらく思っている。こんな風に事が転じるかもしれないなどと私は思わなかったのだ、というのも、もし私が思い至っていたなら、[当然] 知らなかったことだが、私は配慮しただろうから。」

オルレアン公の告白の前に、フロワサールは、新郎新婦を守るような言葉を書き添えているが、祝いの席がこの事件によって台無しになってしまった2人に、僅かでも何か咎があると考える者がいるとしたら、それは花嫁の結婚が4度目である、ということを知っている者だけではないだろうか。フロワサールが、この情報を知っているにも係わらず敢えて言い落としたとすれば、この余興からシャリバリの反社会的要素を消し去る目的からに違いない。彼は、悲劇の背景となる余興のイメージを変え、「燃える者達」のイメージをも変えたかっただけではないだろうか。フロワサールの言い落としは他にもある。この余興の発案者として冒頭で名前を挙げたユゴナン・ド・ジャンゼについてである。死傷者の報告の中に彼の名は明示されず⁽¹⁶⁾、奇妙なことに、王が事件後初めて2人の叔父達と王宮で会った際に死者達へ示す悲しみにおいても、死者4名の内他の3人の名だけが挙げられ、ユゴナン・ド・ジャンゼの名前は言い落とされる。

Et bien dist à ses oncles que sa belle tante de Berry l'avoit sauvé et osté hors du peril, mais il estoit trop fort courouchiés du conte de Jouy et de messire Yeuwain de Foix et de messire Charles de Poitiers.⁽¹⁷⁾

さて[王は]叔父達にしかと述べたのだ、義理の叔母であるベリー公妃が彼を救い、危険を取り去ってくれたが、彼はまだ、ジュイ伯、イヴァン・ド・フォワ殿、そしてシャルル・ド・ポワティエ殿⁽¹⁸⁾の事でひどく悲しんでいるのだと。

パントワンの記述の中で、シャリバリの行為に結びつくように特筆されていた人物の名前が、フロワサールの記述においては、その冒頭部分を除いてきれいに削られている。フロワサールが明らかに、この宴の性質と「燃える者達」のイメージを改善しようと努めていることは、彼が野蛮人の踊りについて、それが伴ったであろう身振りや激しさを一切説明していない点からも推察できる。彼が排除に努めたこれらの要素に代えて、フロワサールが「燃える者」へ加えようとしたイメージは、この惨事の最後の部分で、「逃れる者」の姿とはっきり対置されて現れることになる。

ところで、フロワサールの記述の中で書き表されるオルレアン公の「燃やす者」としての役割の中に、兄殺しの意図があったのではないかという疑惑を読み手が感じ取るとしたなら、それは否定されるべきである。1407年のオルレアン公暗殺の翌年、パリ大学の神学者ジャン・プティに

よって、オルレアン公の謀殺を図ったジャン無畏公の弁明⁽¹⁹⁾が行われたことに象徴されるように、後世フロワサールの「燃える者達の舞踏会」の記述は、ブルゴーニュ派のプロパガンダと結びつけられるようになる。ストックが分析する通り、15世紀後半に制作されたフロワサールの『年代記』の写本にある複数の装飾挿絵は、筆者の言説を超えて、オルレアン公の兄殺しの意図をほのめかすモチーフを自由に使用している⁽²⁰⁾。しかし、この後世の解釈とは反対に、フロワサールの記述の中では、「燃やす者」であるオルレアン公と「逃れる者」であるシャルル6世は、むしろこの悲劇を生み出すきっかけを与えた者としてある種の連帯性を帯びて提示される。王のこの事件への連帯責任は、フロワサールが提示する、事件を知ったパリ市民達の間でささやかれる言葉に現れる。

Quant ce vint au matin et la nouvelle fu sceue et espandue parmy la ville et cité de Paris, vous devez sçavoir que toutes gens furent moult esmerveillés et disoient les plusieurs communement parmy la ville de Paris que Dieu avoit encore monstré secondement⁽²¹⁾ ung grant exemple et signe sur le roy et que il convenoit et appartenoit que il y regardast et que il se retraist de ses joennes wiseuses et que trop en faisoit et en avoit fait, lesquelles n'appartenoient point à faire à ung roy de France et que trop joennement se maintenoit et estoit maintenus jusques à ce jour.⁽²²⁾

朝にはこの知らせはパリの町や城内に知られ、広まることとなった、あなた方はお知りになるべきなのだ、皆おおいに驚き、パリの市内では絶えず幾人かの者達が言っていた事を、神が再び2度目に大なる教訓と奇跡を王にお示しになったのだと、そして王がそれに注意を払い、若気の至りの暇つぶしと手を切ることが望ましくふさわしいものだと、フランスの王がなすにはふさわしくないことを、あまりにやりすぎであるし、[これまでも]やりすぎていたのだと、王は未熟なままであり、その日までずっと未熟なままだったと。

パリ市民の口を借りたフロワサールは、「逃れる者」・王が、単なる被害者ではなく、この悲劇が生み出される原因と理解されるべきことを明らかにする。市民たちの漏らした王の印象は、宴での彼の行動によって増幅される。それは次のようなものだった。5人の仲間達と野蛮人の仮装に身を包み、広間に登場すると、王はすぐ踊りを止め、自分の後ろで数珠繋ぎに身体を紐で結び合わせた5人の仲間達が忠実に踊り続けているのを放って置いて、貴婦人達の許へ自分の仮装を見せびらかそうとやって来る。そこで見物していた、義理の叔母でありながら一番年若い貴婦人ベリー公妃に、自分が誰かを当てさせようとしている時、弟のルイが、自分の行動をよく考えもせず、前にいた従者の松明を下げ、踊り手達をもっとよく見ようとしたので、火は踊り手の衣装にすぐに燃え広がり、広間は大混乱に陥る。

「燃やす者」「燃える者」「逃れる者」：
「Bal des ardents 燃える者達の舞踏会」の中でフロワサールが描くイメージについて

Tel meschief, tel douleur et tel crierie avoit en la salle que on ne sçavoit auquel entendre.
La ducesse de Berry delivra le roy de ce peril, car elle le bouta desubz sa gonne et le couvry pour eschiever le feu et lui avoit dit, car le roy se vouloit partir d'elle à force :

« Où voulez vous aller ? Vous oez que voz compaignongs ardent ! Qui estes vous ? Il est heure que vous vous nommez ! »

« Je suy le roy », dist il.

(...)

Le bastard de Foix, qui tous ardoit, crioit à haulx cris :

« Sauvez le roy ! Sauvez le roy ! »

Voirement fu il sauvez par la manière et adventure que je vous ay dit. Et Dieux le volt aidier, quant il se departy de sa compaignie pour aller veoir les dames, car se il fuisse demourez avec ses compaignons, il estoit perdu et mors sans remede.⁽²³⁾

広間には、あまりの不幸な出来事、あまりの苦しみ、そしてあまりに喚き声があふれていた
ので、人々はなにも聞こえなかった。ベリー公妃が王をこの危機から救い出した、という
のも彼女は、火を避けるために、彼を彼女のドレスの下に入れ、彼を覆って、彼に言ったの
だから、というのは、王が力づくで彼女から離れようとしていたから。

「どこに行こうというのですか？あなたは、あなたのお仲間達が燃えているのが聞こえない
のですか？あなたはだれなのです？もう名乗る時でしょう！」

「私は王だ」と彼は言った。

(中略)

フォワの庶子は、全身燃えながら、大声で叫んだ。

「王を救え！王を救え！」

たしかに彼は救われたのだ、私があなた方にお話ししたやり方と成り行きによって。神が
彼を助けることを望まれたのだ、彼は貴婦人方に会うために仲間たちから離れたのだから、
というのももし彼が仲間とともにとどまっていたのなら、彼は手の施しようもなく助からず、
死んでしまっただろうから。

神に救われた方法としてフロワサールが提示するシャルル像は、ひどく情けない有様で描かれる。
これはフロワサールの演出なのか、それともパントワンが敢えて言い落とした「事実」なのだろ
うか。いずれにしても、フロワサールがその記述の中で、王のこのような姿を明示したことに変
わりはない。シャルルがなぜ救われたのかを伝えるフロワサールの言葉に皮肉の影を見え
る程に、女性のドレスの下で火を避ける姿が晒される「逃れる者」と、「燃える者」・イヴァンの最

期は鮮やかに対置される。自らが燃えながらも、王の身を案じ、王を救おうとする庶子イヴァンが発するたった二言によって、フロワサールはイヴァンの騎士としての資質の全てを描いてみせた。そしてこの箇所が、フロワサールがずっと追ってきたフォワ伯領の継承問題の真の終結を提示することになる。非正統の跡継ぎ候補だった者は炎によって消えた。片や神から選ばれた正統な君主、片や庶子ゆえに父親に望まれたにもかかわらず後継者となることが叶わなかった非正統の存在、という二者の命運がここで見事に交差する。

フロワサールが描いてみせた「逃れる者」としてのシャルルの姿が、フランス王国とその民の運命を担う象徴的存在である王の存在意義を少しも変えていない事は、この事件の後で、フロワサールがパリ市民に語らせた言葉で示される。

La communauté de Paris en murmuroit et disoit sans contrainte :

« Regardez le grant meschif qui est pres advenus sur le roy et, se il euist esté attrappez ne ars si comme les adventures donnent et que bien en faisoit les œuvres, qui fuissent ses oncles devenus et son frere ? Ilz doivent estre tous certains que ja pié d'eulx n'en fuist escappez, car tous eussent esté occis et tous les chevalliers que on euist trouvé dedens Paris. »⁽²⁴⁾

パリの市民は、この事について遠慮なく囁き合い、語り合った。

「王に起こりかかったあの大変な災いを見てみろ、もし王が〔火に〕巻かれ、あのような偶然がきっかけで燃えてしまっていたら、そしてそれは簡単に引き起こされただろうけれど、王の叔父達と王の弟御はどうなったことだろう？ 彼らは確かに分かっているはずだ、彼らの内誰一人として、免れなかつただろうということを、というのも〔彼ら〕全員は、そしてパリで出くわした騎士達は皆殺されていたただろうから。」

すでに前年ル・マンで一度狂気の発作に取りつかれており、今回の騒動で生来の軽薄な性質を露呈することになるシャルル王であっても、パリ市民の心は決して彼から離れて行きはしない。一方、いくら資質に富んでいるとはいえ、非正統な存在、取るに足りない者は、その身分にふさわしく忘れ去られていく。この現実、ベリー公の語る言葉にはっきりと表れる。

« Monseigneur, ce qui est advenu ne poet on recouvrer. Il vous fault oublier la mort de eulx et loer Dieu et regracier de la belle adventure qui vous est advenue, car vostre corps et tout le roiaulme de France a esté par ceste incidence en grant adventure d'estre tout perdu. (...) »⁽²⁵⁾

「殿、起こってしまったことは取り返しがつきません。彼らの死は忘れて、神を讃え、あ

「燃やす者」「燃える者」「逃れる者」：
「Bal des ardents 燃える者達の舞踏会」の中でフロワサールが描くイメージについて

なたに起こった素晴らしい偶然を感謝するべきです、というのもあなたの身体とフランス王国の全ては、この成り行きによって、全て失われる瀬戸際にあったのですから。(略)」

この言葉の後で、この一件がパリ市民の間に引き起こした激しい動揺を、王の姿を見せる事で鎮めようと、叔父達二人によってノートルダム詣でが提案され、甥のルイの若さゆえの軽率さは、二人によって諫められる。死者達へ対しても、葬儀が執り行われ、祈りと寄進とがなされ、こうしてこの出来事は少しずつ忘れ去られていくことになる。だがフロワサールは最後に付け加えずにはいられない。

Ha, conte Gaston de Foix, se de ton vivant tu eusses eu telles nouvelles de ton filz, comme il en estoit advenu, tu eusses esté courouchiés oultre mesure, car moult l'amoyes. Je ne sçay comment on t'en eüst appaisié ! Tous seigneurs et toutes dames qui en ouoient parler parmy le roiaulme de France en estoient moult esmerveilliés et à bonne cause.⁽²⁶⁾

ああ、ガストン・ド・フォワ伯よ、もし生前に、何が起こったのか、あなたのご子息のこの知らせを受けていたなら、当然ながら、あなたの悲しみは度を越えたものであったことでしょう。というのも、あなたは彼を愛しておられたのだから。どうやってお慰めすることができたか私には思いつきません。フランス王国でこのことが話されるのを聞いたあらゆるご領主や貴婦人は、当然のことながら、このことでたいそう心動かされたのでした。

フォワ伯へ向けられたこの哀悼の言葉で、「燃える者達の舞踏会」の語りを終えるフロワサールは、この出来度の記述において「燃える者」の形を借りてイヴァン・ド・フォワの最期を描き、筆者が興味を持って追いつけたフォワ伯領の継承問題の真の幕引きを行ったのである。

※ ※ ※

以上のような記述によって「逃れる者」・「燃やす者」として提示されたシャルルとルイは、その肩書から引き離されたより人間的側面を描かれることになった一方で、費やされる言葉は決して多くはないが、明らかにその構成によって、フロワサールはイヴァンの最期を称揚し、正統な存在である王と王弟の愚行と対置させた。この対比の構図の中に、フロワサール個人が抱えていたオルレアン公への個人的感情はどの程度反映しているのだろうか。ルイ・ドルレアンに対するフロワサールの反感については、オルレアン公の舅ジャン・ガレア・ヴィスコンティ Gian Galéas Visconti によるクラランス公⁽²⁷⁾の毒殺の疑惑から⁽²⁸⁾、また年代記執筆をフロワサールに依頼したものの、破産によって1391年にその所領をルイ・ドルレアンへ売り渡すことになるギイ・ド・ブロワの一件から、すでに指摘されている⁽²⁹⁾。この点においてはまた機会を改めて考察するつもりであるが、いずれにしても、フロワサールは、その著作の中で描いた王宮での大

事件に、当時の人たちの目にそのようなものとして受け入れられる「現実味」を与えた。そしてそれを、読み手・聞き手がまだ見たこと・聞いたことのない視点から提示することに、彼の著作の成功を賭けたのではないだろうか。グネの言葉を借りれば、パントワンは、同僚や有識者達の代弁者として公的立場に留意する故、人をそうあるべき通りに描き、フロワサールは、真実らしさをより気にかけて、出来事の結果とその原因を明らかにし、登場人物達の心情に深く迫ろうと努めるが故に、人をそのようである通りに描く⁽³⁰⁾のである。フロワサールの描いた「燃える者達の舞踏会」のどの部分までが真実であり、どの部分までがフィクションであるのか指摘する術はない。しかしこの作品を手にとった者達に、フロワサールの語りが知らせるこの事件は、「そのように起こった」ものとして受け入れられたのである。フロワサールが「燃える者達の舞踏会」の記述の中に作り上げた構図は、それを目にする者がすでに共有していた、継承者の正統性と非正統性という「資質」への盲信のほころびではなかつただろうか。

注

- (1) Vermandois とも表記。ピカルディ地域圏に属する。
- (2) Pintoin, Michel, *Chronique du religieux de Saint-Denys : contenant le règne de Charles VI, de 1380 à 1422*, publiée en latin pour la première fois et traduite par L. Bellaguet, t.2, Paris, Crapelet, 1840, p. 64, 66.
- (3) Ginzburg, Carlo, « Charivari, associations juvéniles, chasse sauvage », *Le charivari*, actes de la table ronde organisée à Paris (25-27 avril 1977) par l'École des Hautes Études en Sciences Sociales et le Centre National de la Recherche Scientifique publié par Jacques le Goff et Jean-Claude Schmitt, Paris, Mouton, 1981, p. 133-134.
- (4) Stock, Lorraine Kochanske, « Froissart's "Chroniques" and its illustrators : historicity and ficticity in the verbal and visual imaging of Charles VI's bal des ardents », *Studies in Iconography*, vol. 21, 2000, p. 134.
- (5) Stock, *ibid.* p. 135-136.
- (6) Pintoin, *ibid.* p. 72.
- (7) « (...), ut murmurabant aliqui, monumentum esset sceleris prius agressi, (...) », Pintoin, *ibid.* p. 72, 74.
- (8) Guenée, Bernard, *La folie de Charles VI : roi bien-aimé*, Paris, Perrin, 2004, p. 294 (annexe).
- (9) Pintoin, *ibid.* p. 68, 70.
- (10) ヴァルヴァロによる校訂版を底本とし、レッテンホーフ版とビュシオン版を補足として使用する。
 - 1) Jean Froissart, *Chroniques de France et d'Angleterre : livre IV*, édition critique par Alberto Varvaro, Bruxelles, Académie royale de Belgique, 2015.
 - 2) Jean Froissart, *Œuvres de Froissart. Chroniques*, publiées avec les variantes des divers manuscrits par M. le baron Kervyn de Lettenhove, tome 15, Osnabrück, Biblio Verlag, 1872.
 - 3) Jean Froissart, *Les Chroniques de Sire Jean Froissart qui traitent des merveilleuses emprises, nobles aventures et faits d'armes advenus en son temps en France, Angleterre, Bretagne, Escosse, Espagne, Portingal et és quatres parties*, nouvellement revues et augmentées d'après les manuscrits avec notes, éclaircissements, tables, et glossaire par J. A. C. Buchon, Paris, A. Desrez, tome 3, 1835.
- (11) Varvaro, *ibid.* p. 320.
- (12) この問題に対する彼の逡巡は、ベアルンの旅で道連れとなったエスパン・ド・リオンとの会話によって示される。

「燃やす者」「燃える者」「逃れる者」：
「Bal des ardents 燃える者達の舞踏会」の中でフロワサルが描くイメージについて

- « Et demorra donc, di-ge, sa terre sans hoir ? » - « Nennil, dist-il ; le visconte de Chastelbon est son cousin germain et son hiretier. » - « Et aux armées est-il vaillant homme ? » - « Certes nennil, dist-il, et pour tant ne le peut amer le conte de Foies, et fera s'il peut ses deux fils bastards, qui sont biaux chevaliers et jones, ses heritiers, et a intencion de les marier en hault lignaigne, car il a or et argent à grant foison. Si leur trouvera femme, par quoy ilz seront aidez et confortez. » - « Sire, di-ge, je le veuil bien, mais ce n'est pas chose deue, de bastards faire hoirs de terre. » - « Pour quoy, dist-il, si est en deffaulte de bons hoirs ? Ne veez-vous comment les Espaignols couronnerent à roy ung bastard, le roy Henry, et ceux de Portingal ont couronné aussi ung bastard ; on l'a bien veu avenir ou monde en plusieurs royaumes et pays que bastards ont par force possessé. Guillaume le Conquerant, bastard, fils d'un duc de Normendie, conquist toute Engleterre et la fille du roy, qui pour le temps estoit, et demora roy et sont tous les roys d'Engleterre depuis ce temps descendus de lui. » - « Or, sire, di-ge, tout ce peut faire il n'est chose qui n'aviengne ; mais ceux d'Armignac sont trop fors, et ainsi seroit donc toudis ce pays en guerre. (...) »

—「それでは、彼（フォワ伯）の領地は、」と私は言う、「相続人がおられないままになるということですか？」
—「いいえ、」と彼（エスパン・ド・リヨン）は言った、「シャトルボンの副伯が彼の実の従兄弟であり、相続人なのです。」
—「それで武勇においては、」と私は言う、「彼は優れたお方なのですか？」
—「いいえ、ちつとも、」と彼は言った、「それゆえフォワ伯は、彼のことを愛することがおできにならないのです。もし可能であるのなら、伯はご自分の2人の庶子をお世継ぎになさるでしょう。勇敢な騎士達で、お若いですし、伯は彼らを身分の高い一族と結婚させようと意図しておいでなのです、というのも、伯は十分に豊富な金銀をお持ちなのですから。そういう訳で、彼らに妻を見つけておあげになるでしょうね、彼らを助け、強固にするために。」
—「殿、」と私は言う、「それは結構ですが、庶子を領地の跡継ぎにするのは適切なことではなりませんね。」
—「なぜです、」と彼は言った、「もし良い跡継ぎがないなら？ あなたはご存じなのですか、いかにしてスペイン人達が庶子のアンリ王を王位につけたか、そしてまたポルトガルの人々が庶子を即位させたことを。そういう事が、世界で起きていることを見てきたのではないですか、庶子が力尽くで占有したいくつもの王国や地方で。庶子であり、ノルマンディー公のご子息だった征服王ギヨームは、イングランド全土と、その当時の王の娘御とを勝ち取って、王となり、以来彼から全てのイングランドの王が続いているではありませんか。」
—「それならば、」と私は言う、「そうならないこともありますまい。しかしアルマニャックの者達はたいそう強大ですし、それではこの地方は常に戦乱状態に置かれることになりましょう。」

Jean Froissart, *Chroniques de J. Froissart*, publiées pour la Société de l'Histoire de France par Siméon Luce, Paris, Renouard, 1869-1975, tome 12, p.71.

- (13) フロワサールの年代記においては、ヴァルヴァアロ版の表記 Hugonin de Gensay に倣いユゴナン・ド・ジャンゼとする。Hugonin de Geussay（レッテンホーフ版）、Hugonin de Guisay（ビュシオン版）、猶パントワンの年代記においては、M. L. Bellaguet の表記に倣いユゲ・ド・ギユイゼ Huguet de Guisay とする。
- (14) Varvaro, *ibid.* p. 322.
- (15) Varvaro, *ibid.* p. 324.
- (16) この事件の4人の焼死者の死亡日について、フロワサルは「二人がその場で息絶え、残りの二人、イヴァン・ド・フォワとジュイ伯が2日後に死んだ」（« Des .iiij. qui là ardoient il en y eubt les deux mors et estains sus la place. Les aultres .ij., le bastard de Foix et le conte de Jouy, furent portez en leurs hostelz et morurent dedens deux jours après à grant painne et martire. », Varvaro, *ibid.* p. 324.）と記しているが、パントワンの記録には「ジョワ二一伯 [=ジュイ伯] が [その場から] 運ばれる途中で息絶え、フォワの庶子とエームリ・ド・ボワティエは、2日経つ前までは少なくとも意識があった。ユゲ・ド・ギユイゼ [=ユゴナン・ド・ジャンゼ] だけが3日間生きていた」（« comes de Jogniaco, cum defferretur, expiravit. Bastardus Fuxinensis et Aymericus de Pictavia ante biduum diem ultimum signaverunt. Solus Hugetus de Guisay vixit per triduum, (...) », Pintoin, *ibid.* p. 68.）とある。

- (17) Varvaro, *ibid.* p. 325.
- (18) フロワサールの記述では、シャルル・ボワティエはヴァランティノア Valentinois 伯となっているが、その肩書に該当する人物がいない。Varvaro, *ibid.* p. 321, note 490参照。パントワンは「エームリ・ド・ボワティエ Aymericus de Pictavia (Aymeri de Poitiers)」と記録している。Pintoin, *ibid.* p.68, 69.
- (19) ジャン・プティはオルレアン公のシャルル 6 世に対する反逆の証として、公のシャルル 6 世暗殺未遂説を「燃える者達の舞踏会」へも言及し展開する。Enguerran de Monstrelet, *La Chronique d'Enguerran de Monstrelet : en deux livres avec pièces justificatives 1400-1444*, publiée pour la Société de l'histoire de France, par L. Douët-d'Arcq, Paris, Mme ve J. Renouard, 1857, tome 1, p. 233-234.
- (20) Stock, *ibid.* p. 132, 149-168.
- (21) ル・マンでの最初の王の狂気の発作以来 2 度目。Varvaro, *ibid.* p. 325, note 495.
- (22) Varvaro, *ibid.* p. 324-325.
- (23) Varvaro, *ibid.* p. 323-324.
- (24) Varvaro, *ibid.* p. 325.
- (25) Varvaro, *ibid.* p. 325.
- (26) Varvaro, *ibid.* p. 326.
- (27) リオネル・ド・クラランス Lionel de Clarence。フロワサールが敬愛する最初の庇護者であったフィリパ・ド・エノー Philippe de Hainaut とエドワード 3 世の息子。1368年ヴァレンティナ・ヴィスコンティ Valentina Visconti と結婚するが、その年の内に死亡した。
- (28) Michel Zink, *Froissart et le Temps*, Paris, Presses Universitaires de France, 1998, p. 9.
- (29) Zink, *ibid.* p. 13.
- (30) Bernard Guenée, *Un roi et son historien : vingt études sur le règne de Charles VI et la Chronique du religieux de Saint-Denis*, Paris, Diffusion de Bocard, 1999, p. 28-29.